



第二章 日体桜華女子高等学校の沿革（第二部：第 三編 学校法人日本体育会経営高等学校の沿革）

著者	日本体育会百年史編纂委員会
雑誌名	学校法人日本体育会百年史
ページ	1176-1207
発行年	1991-10-28
URL	http://id.nii.ac.jp/1444/00001092/

第二章 日体桜華女子高等学校の沿革

(一) 創設とその趣旨

昭和三十二年九月二十日、学校法人日本体育会理事会は翌三十三年度開校とする「桜華女子高等学校」の設置を決定した。ただちに設立準備に入り、同年十二月五日に設置認可申請書が東京都に提出された。また設置計画では、日本体育大学構内に施設を確保するとされていたために文部省大学設置審議会の承認が必要とされた。これらの折衝は順調に運び、翌三十三年一月二十三日付で、文部省大学学術局長から承認の通知を受け、さっそく校舎建築に取りかかった。翌二十四日には東京都私学審議会において本校の設立認可が決定を見、ただちに入学案内等の準備を進め生徒募集に踏み切った。三月一日、東京都知事より、正式に設置認可を受け四月一日開校が決まった。

飯塚晶山初代校長の手になる『学校法人日本体育会桜華女子高等学校創立史』（以下「創立史」と略記）によれば、女子高等学校の設立の要点は次のようなものであった。

一、最近東京都の人口ますます密度を加え、従って世田谷区を中心とし、城南城西地区およびその附近の女子教育の要望甚だしく切実をみるに至ったこと

二、日本体育大学および同女子短期大学は七十余年の伝統を有する優秀な体育指導者を養成する機関であるが従来教育実習校としては、男子教生に対する荏原高等学校のみであって、女子教生に対する施設のないこと

を多年遺憾とし、その必要性極めて緊急なものとあること

三、次代の健康な国民育成の根本が一に女性の健体にあるは言うまでもなく、即ち健全な母体の形成こそ、国家社会隆昌の基をなすが故に、健康を基本とする生活教育の実践を重んずること

四、女子は将来家庭教育の重責にあたり、徳性の培養に努めるため、特に孝道精神をもつて一貫教育を目指すこと

五、女子高校教育は真理を愛し学問を好む習慣を養ひ、社会の進歩に応じた感覚を培ひ、女子としての一般教養の外、卒業後実生活殊に社会活動に必要な諸種の特別指導を行ふこと

右の設立の要点に見られるように、桜華女子高等学校の設立の意図は高校進学者の増加に対応すること、日本体育大学学生（特に女子学生）の教育実習校としての機能を有すること、さらに健康を前提にした教育方針を女子教育にもり込ませることに求められる。これをさらに設置趣意書で確かめてみよう。当該設置趣意書によると教育方針は「身体精神両生活の健全な向上発展を基礎とし、徳性の涵養、特に躰教育に留意し、女子として実際に役立つ教養に重きを置き、全生活を通して自主自発的に陶冶成長する有為な家庭の婦人、国家社会の公民を育成することを目的とする」とあり、さらに、「日本体育会が体育専攻の永き伝統と歴史を有する日本体育大学及び女子短期大学を経営し、男女体育指導者の養成に努力している」こと、しかも「これが教育実習校としては男子教生に対する在原高等学校だけであつて、女子教生に対する施設がないことを多年遺憾とした」ことから、女子実習校の必要性が極めて緊要課題であることを強調している。すなわち、健全な女性教育を基本とし、あわせて日本体育大学の実習校としての役割が、本校設立の重要な目的であつたのである。かくして、東京都世田谷区深沢町三丁目三十三番地、

日本体育大学構内に「桜華女子高等学校」は創立された。なお、校舎はすでに、文部省からの認可が下りた時点で着工され、昭和三十三年九月二十一日に落成した。今日の日本体育大学七号館である。

とまれ三回にわたる入学考査を行い、四月六日、一〇二名の入学者を迎えて、第一回入学式が挙行され、文字通り、「桜華女子高等学校」の発足を見たのである。そこで、昭和三十三年四月一日に制定の記念すべき学則を以下に示しておきたい。

桜華女子高等学校学則

第一章 総則

第一条 本校は教育基本法及び学校教育法 of 精神にもとづいて、中学校を卒業した女子に高等普通教育を施し、特に自主自覚の下に心身の健康を期し、教養を積み、徳性を養い、生活教育の実践に努めて、有為な家庭の婦人、国家社会の公民を育成することをもって目的とする。

第二条 本校に本科として通常課程の普通科を置き、修業年限を三年とする。

第三条 本校の生徒收容定員は本科普通科二四〇名とする。

第二章 学年、学期、休業日

第四条 学年は四月一日に始まり、翌年三月三十一日に終るものとする。

これを分けて左の二学期とする。

前学期は四月一日に始まり、九月三十日に終る。

後学期は十月一日に始まり翌年三月三十日に終る。

第五 条

休業日は次の通りである。

- 一、国民の祝日、日曜日、日本体育会及び本校記念日
- 一、夏季休業（七月二十一日より八月三十一日に至る）
- 一、冬季休業（十二月二十五日より翌年一月八日に至る）
- 一、学年末休業（三月二十五日より三月三十一日に至る）

第三章 教育課程授業時数単位数

第六 条 教育過程、毎週学習時数及び単位数は次の通りである。

	科会社	語国	教科 科目 各年別 単位時数	
			単位時数	科目
数 学 I	人 文 世 界 日 本 社 文 地 理 史 会	国 国 語 語 乙 甲		
六	三	三	第一 年	普 通 科
三	四	一 三	第二 年	
	三 四	二 三	第三 年	

特別教育活動	庭 家	外国語	術 芸	健保 育体	科 理	学数
	食 被 家 物 服 庭 一 般	英 語	書 美 音 道 術 楽	保 体 健 育	生 化 物 物 学 理	数 学 II
	四	四	(選二) 二	三	三 二	
	二 二	四	(選二) 二	一 三	二 三	
二	二 二	四	{選二}	一 三	三	三

第四章 入学、転学、退学、卒業

第七 条 中学校若しくはこれに準ずる学校を卒業した者または監督庁の定める所により、あるいは本校においてこれと同等以上の学力があると認められた者を本科普通科に入学させる。

第八 条 入学志願者は本校所定の入学願書と出身中学校長の調査書（報告書）に入学考査料を添えて願出するものとする。

第九 条 入学許可は志願者の出身学校における成績と本校における入学考査及び身体検査の結果により校長が決定する。

第十 条 入学を許可された者は、直ちに本校所定の保証人を定め、誓約書を提出し、入学料を納入することと保証人を変更しようとする時は、新旧保証人の連署をもつて届出るものとする。

第十一 条 保証人は入学者の父兄またはこれに代つて入学者に関する一切の責任を負い、且つ学校の教育に協力するものであることを要する。

第十二 条 生徒が病氣その他の事情のため欠席しようとする時は直ちにその理由を詳記し必ず保証人より届出るものとする。但し病氣のため一週間以上にわたるときは医師の診断書を添えなければならぬ。

第十三 条 転学しようとする者はその理由を詳記して保証人より届出なければならない。

第十四 条 退学しようとする者は、その理由を詳記した保証人連署の退学願を差出さなければならない。

第十五 条 病氣またはその他の理由で休学を願ひ出た者に対しては、止むを得ないと認めた場合に限り、校長は一年以内の期間でこれを許可することがある。休学期間内でも休学の事由が休んだ時は原学

年以下に復させる。

第十六条 卒業を認めるには、平素の成績を評価してこれを定めるか、所定の学習単位数を修得することを要する。

第十七条 卒業したと認めた者には卒業証書を授与する。

第五章 教職員組織

第十八条 本校に左の教職員を置く

校長 一名 教諭 十二名以上 講師 若干名 実習助手 二名

事務職員 二名 学校医 一名 学校歯科医 一名

校長は校務を掌り所属職員を監督する。

教諭は生徒の教育を掌る。

事務職員は事務に従事する。

実習助手は実習に関し教諭の職務を助ける。

講師は教諭の職務を助ける。

学校医は学校保健に関する職務に従事する。

第六章 賞 罰

第十九条 学業に精励し身体壮健で成績優秀、且つ品行方正な生徒はこれを褒彰する。

第二十条 校長は必要と認めた時生徒に左の懲戒を加えることがある。

一、訓戒 一、謹慎 一、出校停止

第二十一条 校長は左の各項の一に該当するものには退学を命ずることがある。

一、性行不良で、改心の見込がないと認めた者

一、成業の見込がないと認めた者

第二十二條

一、正当の理由なくして出席常でない者
一、校内の秩序を乱し、その他生徒としての本分に反する者

校有物を破損亡失したものは、現品若しくは現金をもつて賠償させる。

第二十三條

第七章 入学査料 入学金 授業料
本校に納入すべき学費は左の通りである。

一、入学査料

五〇〇円

一、入学金

三、〇〇〇円

一、授業料月額

一、二〇〇円

すべて既納の料金は理由がどうであつても返さない。

第二十四條

授業料は休学中もこれを納入しなければならない。

第二十五條

授業料を滞納したときは出校停止を命ずることがある。

附則

一、この学則は昭和三十三年四月一日より実施する。

二、この学則実施上必要な規程は校長において別にこれを定める。

(二) 教育方針

米本卯吉理事長は、つねづね「健康は母が私にくれた最高の財産だ」といい、「自分を育んだ母親のような女性を養成する学校を創りたかった」といつていた。この米本理事長の思い入れは、前述の設置趣旨にも明らかであるが、

昭和三十五年に確立された次の教育方針に端的に示されている。

「本校は中学校卒業の女子に高等普通教育を施し、特に孝道を一貫して、心身の健康を期し、徳性培養の根底を「しつけ教育」におき、真理を愛し学問を好む精神を発揚して知性の進展につとめ、自覚実践のできる役立つ人間形成を目的とする」

この精神はそのまゝ、本校の「健康」「努力」「敬愛」の校訓となり、今日の教育方針の中心となっている。

(三) 初期の教育

日本体育大学とキャンパスを共有して発足した桜華女子高等学校であつたけれども、教育活動に遅滞はみられなかった。四月二十四日には生徒自治会会則が制定され、二十六日には生徒自治会発会式が挙行されている。これによつて文化部（新聞、美術、英語、手芸、音楽、書道、演劇、華道）と運動部（陸上、水泳、ソフトボール、バスケットボール、バレーボール、卓球、庭球、体操）が始動する。七月には新宿コマ劇場で観劇したり、臨海教養（水泳実習）を鎌倉由比ヶ浜で実施、さらに九月には新校舎が落成し、移転する。

かくて翌三十四年は、運動部は対外試合に初参加し、バレーボール部は五月、新人戦三位という好成績を残している。六月には、大学からの教育実習生を迎え、十一月には、第一回の文化祭が開催され、学園生活に彩りがそえられた。

完成年度となる三十五年度の行事予定は次に示すとおりであるが、これによつて本校の教育方針と女子高校生たちの学園生活を推すことができよう。

昭和35年度 行 事 予 定 表

月	日	曜	行	事	月	日	曜	行	事	
4	1	金	最初の職員会議		8	11	木	} 体操 (山口)		
"	5	火	入学式		"	↓				
"	9	土	始業式		"	14	日			
"	18	月) 総合テスト		8	22	月	} 北海道修学旅行 (3年)		
"	19	火			"	↓				
"	23	土	父母の会総会		9	1	木	} 前期考査 (1・2年)		
"	29	金	(祝) 文化祭準備		"	20	火			
5	1	日	} 第文創示・学芸会 2 化作会 回祭展・体育祭		"	↓				
"	2	月			"	22	木			
"	3	火			10	9	土	父母の会懇談会		
"	31	火	クレペリン検査 (3年)		"	15	土	(午後) 日本体育大学		
6	7	火	} 中間テスト		"	22	土	研究発表実演会見学		
"	8	水			"	23	日	第14回高校連合体育祭参加		
"	9	木	父母の会 (級毎) 懇談会		"	↓		第15回国体都代表体操		
"	15	土			"	27	木	選手 (松原講師, 2年)		
7	14	木	} 鎌倉臨海教養会		"	1	火	香取光子) 出場優勝		
"	15	金			11	1	火	就職試験始まる		
"	16	土	} 夏季講習会 (2・3年)		2	1	水	昭和36年度入学試験		
"	18	月			"	14	火			
"	↓				"	↓		卒業試験 (3年)		
"	22	金	} 庭球 (徳島)	全権大会 高校選手	"	16	木	第1回卒業式		
8	1	月				3	10	金		
"	↓		} 陸上 (神戸)		"	15	水	} 学年末試験		
"	3	水				"	↓			
"	4	木			"	20	月	終業式		
"	↓				"	24	金	新入学生父母懇談会		
"	7	日			"	26	日			

(「創立史」より)

ところで、すでに取り上げたが、三十三年発足から行われた学校行事としての「臨海教養」に今一步立ち入ってみたい。三十五年七月の要項「臨海教養」のしおりから、その内容を点描してみよう。「臨海教養」の目的は「生徒の自主性を尊重し、自治精神を養い、明朗清新な友情の下に、人文地理、社会情勢、名勝史跡等の研究、海における水泳の練習を行うなど秩序正しい団体生活を営むこと」とされた。したがって設立の趣旨に見られた「健康な国民育成の根本が、一に女性の健心建体にあること、即ち健全な母体の形成こそ邦家隆昌の基をなすが故に、健康を基本とする生活教育の実践を重んずること」という内容が、この「臨海教養」に期待されたとみることができよう。

(四) 移転と施設の拡張

創立当初、学校が日本体育大学構内に併設されていたため、運動施設や一部の教室は大学と共用せざるを得なかった。ために十分な施設・設備の整備が望まれていたといえよう。

昭和三十七年、これまで二クラスずつできた学級規模が新入生から三クラスとなり、収容すべき校舎が問題となつて、にわかに専用地取得への気運が昂まった。三十七年のクラス増をうけて、三十八年五月には校舎の増築を行ったが、プレハブ二階建二教室は、当座をしのぐ以上のもではなかった。学校設立認可の際、大学隣接の「農地約五千坪を専用地として早急に購入すること」が条件となつていたのであるが、その地域の地価の値上がりが予想以上に甚だしく、購入は困難であり、代替用地の獲得は正に焦眉の急を要するところであつた。

このようにして着目されたのが、東村山市富士見町二丁目五九六番地の現在地、約八、三〇〇坪の土地であつた。

この土地は、戦前の「東京陸軍少年通信兵学校」の敷地の一部に当たり、当時は農林省所轄の国有地であった。これの払下げについては、多大な困難があったが、米本理事長、降旗校長、西村体育会本部事務長等関係者の奮斗努力のおかげで、昭和三十九年七月一日、ついに農林省より借用許可が下りた。さらに九月二十六日、東京都より学校位置変更許可が下り、いよいよ学校移転が決まったのである。

かくして、同年十一月二十四日、校名を「日体桜華女子高等学校」と改称することを決め（校名変更の東京都の受理は四十年二月）、翌四十年三月三日、新校舎の第一期工事が竣工し、その四月から東村山校舎第一回生の募集を行い、九十二名の新入生を迎えて、東村山校舎に一年生、世田谷本校に二、三年生という形で新しい出発をするようになった。

学校の移転は通常の場合、決して容易なことではない。まして都心から都下の郊外への移転であればなおさらのことである。生徒の通学区域も、生活環境も全く異なった地域への移動だからである。しかし、本校の場合は幸いにして大学の構内に拠点となるべき施設を有していた。したがって学年進行にともなって、施設の整備とともに入学者も新しい地域の出身者に切り換えていくことが比較的容易にできたのである。このことは本校の教育方針を実現していく上には、まことに幸運であったといえる。

昭和四十一年一月三十一日に新校舎の二期工事が竣工、同年三月三十一日には本校教育のシンボルともいふべき礼法室が完成し、着々と新しい教育環境が整備されていった。昭和四十二年二月二十日、待望の体育館が落成して新しい学園の基本体様が整った。同年三月十日、世田谷校舎最後の卒業式が挙行され、昭和三十三年開校以来、八年目にして世田谷校舎時代が終了したのである。この日、卒業生を送るべき在校生は東村山校舎からかけつけ、送

別とともに先輩校の校風、伝統を受け継いで新しい校舎での再生を誓った。

昭和四十二年四月一日、移転を契機に学則を変更して定員六〇〇名が認可され、翌四十三年一月一日には校舎の第三期工事が完了し、同年三月十日、東村山校舎第一回卒業式（本校通算八回）が挙行された。

昭和四十三年には定員七五〇名が認可され、同年度新入生は二七六名（六学級）を数えて中規模校へと進展していくのである。昭和四十四年二月には第四期工事が完了し、ようやく東村山校舎の本館が完成した。同年三月末には日体大校舎の一部を移築して第二体育館とし、昭和四十四年七月十五日にはプールが完成して、一通りの体育施設が整備されたのである。かくて、翌四十五年四月一日よりクラブ活動全入制が実施に移されている。

昭和四十七年十一月には、定員九〇〇名が認可され、さらに翌四十八年には、一、二〇〇名の認可を受けるに至り、実に設立当初定員（二四〇名）の五倍をも確保する規模に発展したのである。このような入学定員の拡大にもない施設も、さらに一層拡充されていた。

昭和四十八年七月三十一日には、創立十五周年記念事業として着工した合宿所が落成し、同年度三月二十日、プレハブ二教室分を増築、昭和四十九年十月三十一日には、既設の本館に並列する新館三階建校舎（特別教室三クラス、普通教室六クラス）が完了し、一年おくれの形で創立十五周年記念式典が挙行された。また、昭和五十三年七月には既設プールの屋内化の屋根工事が完成、それに先立ってクラブ部室が新設されて、生徒施設の充実もはかられた。昭和五十三年十月三十一日、創立二十周年記念式典が挙行され、生徒総数一、二五〇名（二十五クラス）を数えた。昭和五十五年七月には北軽井沢に研修寮（二階建、八〇名収容）が完成、夏期施設として、クラブ活動、受験合宿等で活用されている。

生徒数の推移

(平成3年3月1日調査)

	世田谷校舎時代													
	1	2	3	4	5	6	7	1	2	3	4	5	6	7
入 学 期	入 学 年 卒 業 年	入 学 生	入 学 生	転 入 生	転 入 退 学 生	休 学 (留 学 等)	卒 業 生							
1	33 ↓ 36	102			6		96	16	48 ↓ 51	361	8	48	1 (留)	320
2	34 ↓ 37	102			12		96	17	49 ↓ 52	449	2	37	1 (休)	414
3	35 ↓ 38	96	3	11			88	18	50 ↓ 53	395	8	44	1 (休)	358
4	36 ↓ 39	90	12	25			77	19	51 ↓ 54	418	8	39	1 (復)	388
5	37 ↓ 40	168	7	14			161	20	52 ↓ 55	426	4	29		401
6	38 ↓ 41	164	3	9			158	21	53 ↓ 56	414	4	35		383
7	39 ↓ 42	155	3	19			139	22	54 ↓ 57	420	6	50	1 (休) 1 (復)	376
8	40 ↓ 43	92	6	10	1 (死)		87	23	55 ↓ 58	360	5	31	3 (休)	331
9	41 ↓ 44	130	5	9			126	24	56 ↓ 59	518	6	36		488
10	42 ↓ 45	217	2	21			198	25	57 ↓ 60	288		17		271
11	43 ↓ 46	277	9	26	1 (休)		259	26	58 ↓ 61	313	1	26	1 (休)	287
12	44 ↓ 47	282	8	23			267	27	59 ↓ 62	495	2	35	2 (休)	460
13	45 ↓ 48	293	8	28	1		274	28	60 ↓ 63	450	3	20		433
14	46 ↓ 49	303	4	38	1 (復)		269	29	61 ↓ H1	443	1	33		411
15	57 ↓ 50	283	7	22			268	30	62 ↓ H2	437	4	10 留舎	1 (死)	430
								31	63 ↓ H3	370	2	17	2 (留)	353
								計		9,311	141	780		8,637

昭和五十九年十一月には日体大から移設された第二体育館を撤収して建てられた地下一階、地上二階の堂々たる体育館が完成した。さらに昭和六十三年の創立三十周年を期して、鉄筋三階建の図書館建設が行われ、同時に旧館の教職員室、特別教室等の大巾な改築、移転工事が進められ、同年八月に完成をみている。

昭和六十三年十一月十日、創立三十周年記念式典が盛大に举行された。本校は創立してから三十年間に生徒数一、二、三〇、二七学級、校地二七、八六三平方米、施設延七、八七六平方米の規模を誇る学園に成長したのである。因みに創立以来、現在までの生徒数の推移を示すと前頁のようになる。

(五) 教育課程の変遷と現状

昭和三十三年の創立当初より、十数年間は教育課程そのものの大規模な改定作業は行われなかった。ただし、三十八年からの新学習指導要領への対応としての科目名や総単位数の変更等がなされている。そこで昭和三十九年度
の教育課程を次に示すことにしたい。

国語	現代国語	教科 科目		各年別 単位時数	普 通 科
		第一年	第二年		
三					
三					
三					

	保健 体育	理 科	数 学	社 会 科	
音 楽 I	保 体 健 育	地 生 化 物 学 物 学 A A	数 学 数学 II A 数学 I	地 理 世 界 日 政 倫 A 史 A 本 治 理 A A 史 経 社 会	古 典 I 乙
二	三	二 二	三	三	二
一	一 三	二 三	二	四 二	二
	一 三	三	四	四 二	二

単 位 数 計	特別教育活動 (ホームルームの週当り時間)	家庭	外国語	芸 術
		被服 I	家庭一般 英語 A	美術 I 書道 II
三三二	一	二	四	三 二
三三二	一	二	四	二
三三二	一	三	四	二

昭和四十年の校名の変更に際しても、学則の一部が変更され、四十二年の収容定員数が増員された時点においては、教育課程の一部が変更になっているので、次に引いておくことにしよう。

理 科	数学	社 会 科	国語	<div>教科 科目</div> <div>各年別 單位時數</div>	
地 生 化 物 学 物 学 理	数 学 II I	地 世 日 政 倫 理 界 本 治 理 史 史 經 社 会	古 現 典 代 乙 国 語		
二 四	五	三	二 三	第一年	普 通 科
三	三	三 二	三 三	第二年	
三	五	三 二	三	第三年	

単位数計	ロングホーム	家庭	外国語	芸術					保健体育
		被服 I 食物 I 家庭一般	英語	書道 II	書道 I	美術 I	音楽 II	音楽 I	保健体育
三四	一	二	五	二			二		三
三四	一	二 二	五	二			二		一 二
三四	一	三 二	B 六 A 四	二		二			一 三

$(A \supset \neg \neg)$ (B 7-ス)

注 本表は、昭和57年度以降に入学する者から適用する。

昭和五十年代に入り、A・Bコースに分かれる教育課程が、模索され実施されていたが、本格的な改革の動きは、五十七年以降であった。この年は新学習指導要領施行年度に当り、文部省告示の線に沿った新しい教育課程が求められた。内容は、一年次から生徒の進路適性等を考慮したAコース（一般コース）とBコース（特別進学習指導コース）に分け、それぞれ必要教科に単位を配当し、基礎学力の養成をはかるというものであった。二年次からは、生徒の進路希望に応じて選択科目を配し、専門的学習の充実をはかった。

このような改革は、とりわけBコースの設置に関連するのだが、入学生の大学進学希望者の増加に伴い、生徒、父母の進学要請に応えるため特別指導形態が必要になってきたことによるものであり、さらにまた、将来、中学校卒業者の激減期に対応してきびしさを増すであろう生徒募集の立場からの条件整備の意味をもつものであった。コース別の習得単位数の概要は前頁に示す通りである。

この教育課程は、その後、Bコースの一般大学と体育系大学の進学希望者の区分上の単位の取得の仕方や礼法の科目を取り入れる等の変更を加えながら継続されたが、平成二年度より新らたな改定がなされた。

それは次に示す教育課程改定の趣旨に基づいてなされている（『教育課程改定に伴う趣意書』平成元年十二月、日体桜華女子高等学校）。

本校では、予てから懸案でありました教育的改革を、新時代への対応を考慮し、本校創立三十周年を期に、従来の教育内容を改め、コース制を実施することになりました。本校生の進路意識も、進学希望者が年々増加の一途であり、そうした生徒への配慮と対応について教育的効果を結実させるためにも、制度的分化の必要性

が重視されました。また、日本体育大学と姉妹校である立場から有効に教育的対処を計る手段として、体育コースと普通コース（文理コース・教養コース・実用英語コース）として専門分化することが望ましいと判断しました。

右の教育課程改定の趣旨にみられるように、教育課程は大きく、普通コースと体育コースに分けられ、普通コースは、さらに三つに区分される。

文理コースは、大学・短大等の上級学校への進学を目的とするコースとして設けられ、教養コースは、現代の情報化社会に対応できるように、コンピューター・ワープロ等を導入し、就職希望者や専門学校進学者向けに用意され、さらに実用英語コースは、現代の国際社会に適應できるように外国人教師等による英会話を徹底的に指導するために設置されている。これら三つのコースは、二次次から適用されることになった。

これに対し、体育コースは、一年次から独立した教育課程で実施される。スポーツに興味や関心をもつ生徒が個々の技能を最大限に生かし伸ばすためのコースとして位置付けられている。この体育コースに関しては改めて後述する。

新しい教育課程表を次頁に示しておこう。

平成二年度からの教育課程の改定も、先の趣旨に加え、きびしくなりつつある生徒募集に対応したものであることは論を俟たない。中学生の具体的進路希望のニーズに充分対応できるような教育環境の整備も求められていると言えよう。

教 育 課 程 表

教科 学 科 目	年 単 位	文 理 コ ー ス						数 学 コ ー ス						英 語 コ ー ス						体 育 コ ー ス					
		1年	2年	3年	1年	2年	3年	1年	2年	3年	1年	2年	3年	1年	2年	3年	1年	2年	3年	1年	2年	3年	1年	2年	3年
国語	単位	必修	選択	必修	選択	必修	選択	必修	選択	必修	選択	必修	選択	必修	選択	必修	選択	必修	選択	必修	選択	必修	選択	必修	選択
国語 I	4							4						4						4					
国語 II		5		5					4		3				5		4				4		3		3
国語演習			3		4						4														
現代社会	4							4						4								4			
日本史					4										2		2								
世界史		4	注		4			4	注		4	注			2		2					4		4	
地理					4																				
政治					2								2												
倫理																									
数学 I	4							4						4								4			
数学 II									3		3												3		3
基礎解析			4																						
代数学				3																					
幾何																									
数学演習					6																				
理科 I	4							4						4								4			
物理																									
化学			4	注		4		4	注		4	注													4
生物																									
実験理科				3		2																			
保健体育	1	1						1	1					1	1					1	1				
ダンス	2	2		2				2	2		2			2	2		2								
体育理論	1							1						1											
スポーツ I																						1	1	1	
スポーツ II																						2	2	2	
スポーツ III																						2	2	2	
野外活動																						1	1	1	
音楽																						2	2	2	
美術	2			2				2	2		2			2			2								
書道										2			2												
英語 I	4							4						4						4					
英語 II		5		6				4		4		3			5		3					3		2	
英会話	1				2			1	1				2	1	3		6					2		2	
英語演習			3		4								4												
演習 I															3		4								
演習 II															2		2								
演習 III																									
家庭	2	2						2	2					2	2					2	2				
家庭演習					4								4												
ワープロ								2			2				2										
パソコン								2			2						2								
簿記																	4								
ビジネス											2						2								
一般教養											2						2								
必修単位	29	23		15		29	27		21		29	29	29	30	30	30									
選択単位			6		14			2		8															
礼拝	1	1		1		1	1		1		1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
特別活動	1	1		1		1	1		1		1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
合計	31	31		31		31	31		31		31	31	31	31	31	31	31	31	31	31	31	31	31	31	31

注・・・社会又は理科のどちらかを選ぶ。

文理コース選択一覧

学 年	2 年 (6 単位)	3 年 (14 単位)
群	I 群 II 群	I 群 II 群 III 群 IV 群
単 位	3 単位	4 単位
科 目	国 数 受 理 英	国 理 英 家 世 理 文 英 日 地 数 政 治 数 受 理 英 会

〈記号説明〉 理英…理数系向き英語、文英…文化系向き英語、日…日本史、世…世界史、地…地理、数…数学、理…物理又は化学又は生物、受理…受験理科

教養コース選択一覧

学 年	2 年 (2 単位)	3 年 (8 単位)
群	I 群	I 群 II 群 III 群
単 位	2 単位	4 単位
科 目	家 珠 ビ 一般	家 珠 ビ 一般 政 治 一般 英 会 珠 ビ

〈記 号 説 明〉

ベ…ベン字、珠…珠算、簿…簿記、ビ…ビジネス教養、一般…一般教養、英会…英会話、政治…政経・倫理

(六) クラブ全入制の採用

学校創立当初より活動を開始した各運動部は、日本体育大学校地内に併設されたこともあり、めぐまれた条件の下に、その成果を発揮していった。生徒自治会の下に設置されたいわゆる運動部各部分は、早くも翌三十四年度さらに三十五年度には、関東選手権大会、インターハイ、国民体育大会に出場し優秀な成績をあげる選手を輩出したのである。

日体桜華女子高等学校の運動部活動を考える時、昭和四十五年より実施されたクラブ全入制をあげることができ。言うまでもなくこの制度は、四十五年の学習指導要領改定（告示）に伴い、クラブ活動の必修化が打ち出されたことに沿うものであった。

この制度は「極めて実施困難な制度であつた」が敢えて取り入れられた。「活動の充実をはかれば、その成果が一層期待でき、結果として、生活指導面でも良い効果をもたらす」（「あゆみ その三十年」日体桜華女子高等学校）と考えられていた。

このようなクラブ全入制の採用についてもう少し立ち入ってみよう。大抵の学校が授業内必修クラブと放課後の部活を分けていたのに対して、本校では授業内と部活を一本化し、授業内のメンバーがそのまま部活のメンバーとして週三回以上活動すること、また顧問も授業内と部活の両方を受け持つという方式を採用した。

この点については多くの論議を呼んだが、結局、週一単位の授業内クラブでも単なる遊びや時間つぶしに終らせたくないという真摯な考え方や熱意がこの方式を採らせたと云える。言いかえれば、教員が教育現場での経験を通

して、教科指導にはできない教育的な意義をクラブ活動に積極的に見い出そうとしていたからに外ならない。

また、全入制スタート時の学校規模や職員構成もこの思い切った方式の採用と無関係ではなかった。即ち、当時はまだ十八学級、生徒数八六〇名、専任教諭三十名の中規模校で、しかも平均年齢二十八才弱という若々しい教師集団でもあった。それに、クラブ数も一通り顧問がついても三、四名の教員が余る位の数で、指導体制としても余裕があったのである。

かくしてクラブ全入制は教育方針である健康、努力、敬愛の精神を培う実践活動の場として位置づけられ、運営上様々な問題をかかえながらも、それ以上に先述の教育的意義に重点を置いて実施されていたのである。

全入制がもたらした数々の教育成果を挙げれば、第一点は何といっても生活指導面である。生徒が教科以外に何かやりがいのあるものをクラブに見い出して充実した学校生活を送ることができれば、これ以上の生活指導はあり得ないのではないかと考えた。生活指導に関するクラブの第一の意義はそこである。

また、生徒把握の点から見ても、ホームルーム、教科授業以外にクラブ活動の観点が附加されるわけで、それだけ幅広い捉え方ができるからである。

第二点は進路指導である。就職希望者が全体の七〇パーセントを占めていた当時としては、クラブ指導が進路指導、とくに就職の面に多大の好影響を与えたことは間違いない。クラブを通じて培われる積極性、協調性、明朗さ等は学力を越えた長所として評価され、社会の側から大いに歓迎されたのである。

第三点として、クラブ自体の発展もめざましいものがあった。運動部にあっては関東大会や全国大会へと駒を進めるクラブが増大した。文化部も文化祭の外に、近隣の市民会館等での発表会まで行われるようになったのである。

このようなクラブ活動の隆盛の蔭には生徒の努力もさることながら、教員各々の並々ならぬ努力と献身的な指導があったことは論を俟たない。

さて、全入制施行から十数年たつうちにそれらの好ましい成果の一方で、これまで課題として先送りされてきた諸問題がだんだん弊害として表面化しだした。その主な点を挙げると次のようになる。

一つは、生徒の増加に伴って学校規模が大きくなりそれだけ指導体制に無理な点が目立ってきたこと、即ちクラブ一顧問制として全教員が授業内、部活の両方の指導に従事しなければならないために日常生起する色々な問題、例えば生徒指導に関することや補習指導、進路相談などに十分な対応ができなくなってきたことである。

二つ目は、生徒の進路状況の変化であるが、年々進学志向が高まりここへきて全入制発足当時の割合と逆転した結果、これまで以上に受験を意識した教科指導或いは受験指導そのものに力を注がなければならなくなった。従つて、全入制クラブが就職面で果たしてきた役割が減少し、逆に進学面からは指導者側にとっても生徒側にとっても大きな障害になってきたことである。

その他こまごまとした問題の中で教員の高齢化も無視できない。この段階で平均年齢が四十二才にもなつていたのである。全体として教科指導、クラブ指導の両方に十分な対応ができなくなってきたことは否定できない。

また、これは意外な側面であるが、運動部の成績向上に伴って徐々に落伍者や敬遠者が増え、そうした目的を持たない或は見失つた生徒を文化部が引き受けざるを得ず、その指導に困難をきたす結果となつていったことである。かくして、全入制としてのクラブ活動の意義が薄れ、これ以上継続することは却つて学校全体の教育指導に支障をきたしかねないとして、二年がかりの議論を経て逆に廃止の方向に踏み切つたのである。発足から十九年目のこ

とであつた。

(七) 体育コースの設置

クラブ全入制廃止の議論の過程で、廃止後の教育体制はどうあるべきかが中心議題となつた。その結果、クラブ全入制に替わる新しい教育体制として、本格的なコース別指導を導入することにしたのである。

その第一は、年来の懸案であつた体育コースの設置である。

体育コースについての基本構想は創立当初からあり、歴代の校長のもとで度々検討されてきたが諸事情のため今日まで実現されるに至らなかつた。

その主な事情の一つは本校が日体大の姉妹校として大学構内に誕生した経緯から、当初より運動クラブが盛んであり、後に全入制がこれに拍車を掛け、クラブ活動が十分に体育コースの役割を果たしているとする考えがあつたこと。

今一つは校名によるイメージの問題で、本校は普通科を標榜しているにもかかわらず、とかく「体育系学校」と見なされがちであつた。従つて、改めて体育コースを打ち出せばますます「体育校」のイメージを強化することになりかねない。それでは普通科として幅広い志望者を求めにくくなるのではないか、とする強い懸念があつたことである。

第一点のクラブが体育コースの役割を果すと言っても、それは全入制が「健在」である場合のことであつて、全入制でなくなれば運動部にしてもどれだけ降盛を維持していけるかどうかは保証の限りではない。従つてクラブ活

動に体育コース的役割を期待することはできなくなった。

本校にとって運動部の消長は大へん重要な意味を持っている。場合によってそれは学校の死活問題になりかねない。体育コース発足の意味もこの点を抜きにしては考えられないわけである。

今一つの校名問題は本校が「日体」を冠する限りどんなに普通科を強調してみたところで、一般の人々から「体育系学校」のイメージを払拭することは不可能に違いない。であれば、むしろ普通科の一部として「日体」にイメージが重なる体育コースを設け、同時にそれとは対照的で且つ明確なイメージのある文理・教養・実用英語と言ったコースを併設して、「普通科」のイメージアップをはかることが必要ではなからうか。

いずれにしても、十八年間本校の特色として推進してきた全入制がここで終わりを告げたのである。これにかわる特色ある教育体制が緊急課題として検討されて当然である。折りしも、生徒急減期を目前にして各私学がその存亡をかけて学校の総合整備に取りかかっている時であり、本校においてもそれは焦眉の急を要する問題である。かくして、新しいコース別指導の導入は巧まずして時宜を得たものと言うことができよう。

(八) ユニークな入試の試み

さて、新しい教育方向の一つである体育コースは入試の時点から他コースとは別の形態を採ることとした。最も体育コースらしい選抜方式としては、第一に実技、第二に面接、最後に内申、の三点から合否を総合的に判定することである。即ち学科試験は行わないとしたのである。

このことは数社の新聞紙上でも取り上げられ、大へん大きな反響を呼んだ。勿論、計画段階では危惧の念から多

くの議論があつたことも事実である。しかし、日体桜華としてはこうしたコースへの遅すぎた「参入」であり、しかも一年次から成立させなければならない事情がある。とすれば、先ずは、入試の段階から新しく、かつ人々の注目を惹くような形態を打ち出さねばならない。

学科試験を行わない入試はユニークであるとともに大きな賭けでもある。しかし、偏差値万能の風潮にこれは一石を投ずることにもなり、それだけ世間の関心事であることに間違いない。

問題は入学後、生徒にどれほど充実感をもたらすことができるか、三年後の進路実績をどうあげられるかである。今後この方式は改訂される可能性もあるが、いずれにせよ体育コースの成否は日体大との緊密な教育上の連携とそこへの入学実績如何にかかっていると云つても過言ではない。

(九) 特色あるカリキュラムの設定

普通コースについては一年次は共通過程を全員が履修し、二年次から文理（進学）、教養（就職及一般）、実用英語（英語）の三コースに分かれて、それぞれ独自の課程を進むことにした。

本来、これらは一年次から実施されるべきであろうが、クラス規模や選抜方法について、まだ二年次での希望状況を見ても必要があり、スタート年度としてはひとまず二年次からの選択の形態にとどめたのである。

本校における普通コースと体育コースは、いわば車の両輪の關係にあり、共に新しい教育体制として強力に推進されるべきものである。従つて体育コースと同じように普通コースも特色あるカリキュラムを以つて、可能な限り生徒個々の多様な個性や進路希望に、細かく対応できるように再編されなければならない筈である。

(十) 礼法指導の意義

全入制が廃止されてクラブ活動が自由参加となれば、もはや生活指導の役割をクラブに期待することはできない。本校に於ける生活指導は新たな局面を迎えたと言えよう。

クラブに替わって生徒各々が教科学習、とくに受験学習等に熱中することによって、張りのある学校生活を送ることができるようなら、それにこしたことはない。しかし現実にはなかなかそうならないから問題なのである。仮りにそうなったとしても、それで生活指導が終わるわけではない。もっと大きな観点に立つて生活指導を考える必要があるのではないか。

そこで、これまで全学年に授業として行ってきた礼法指導をもっと生活指導に活用する必要性が出てきた。礼法は本校の教育目標の一つ、「敬愛」の精神を培う一方法として、昭和六十年代から正規の授業に取り入れたものであるが、その知識と実践学習が教室の中だけに止まらず、平素の生活の中にどれだけ生かすことができるかが重要である。

本校の創立理念の中にある蜚教育の立場と礼法指導とが一体となってこれからの生活指導に大きな役割を果たす時が来たと言えよう。

(十一) 進路指導の現状

高等学校での進路指導は、教科指導や生活指導同様、学校の教育目標の達成のために大切な機能の一つである。

そして、その目的とするところは、生徒が自らの将来を自ら判断し、選択する必要な知識や態度を養うことに資することである。

本校においては、学年毎にそれぞれ進路目標が設けられ、より適切な指導がなされるように計画されている。それぞれの学年の内容は次に示す通りである。

第一学年では、「高校生活への適応」「目的意識の喚起」を目標に置き、欠席、遅刻の防止、挨拶の励行、授業での真剣な取り組み、クラブ活動への積極的参加などの基本的な生活習慣を通して、自己管理を図るように努めている。その他、LHRの時間に『進路ノート』（実務教育出版）を購入し、具体的な進路学習を進めている。

第二学年では、目標を「卒業後の進路の明確化」「進路情報の把握」に置き、前述の『進路ノート』の内容を検討したり、就職用の問題集や進路適性検査の実施、進学者への夏休みの受験合宿を行う等、様々な実力養成の試みを行っている。

第三学年では、より具体的な進路指導が中心となり、進路別のガイダンス、外部団体の校内での進路説明会等を行い、個人面接を通じて、心構えや適性の把握に努めている。

就職に関して言えば、近年、高校生の就職は厳しさを増す状況となっている。産業構造の変化、OA化による合理化、求人の高学歴化といった問題がその要因であり、高校生の人材の質が問われていると言える。この点の改善に向けられた進路学習が求められているところである。

進学については、基礎学力の充実が、基本的課題であり、日常的な努力が求められている。

近来、専門学校への進学希望者が増している傾向にあるが、その場合も、大学、短大進学以上に、将来への職業

本校の進路状況

	61年	62年
進学	51%	53%
大短学	24人	18人
専門学	52人	58人
大学校	159人	152人
就職	34%	40%
金融	25人	19人
販売・サービス	64人	80人
一般会社	67人	73人
家事	3%	1%
	25人	6人
その他の (留学・浪人)	10%	6%
	44人	27人
合計	460人	433人

「あゆみ その三十年」八十五頁)

意識が必要とされることを念頭に置き、学校選択が行われねばならない。
六十一年、六十二年の進路状況は、次に示す通りである。

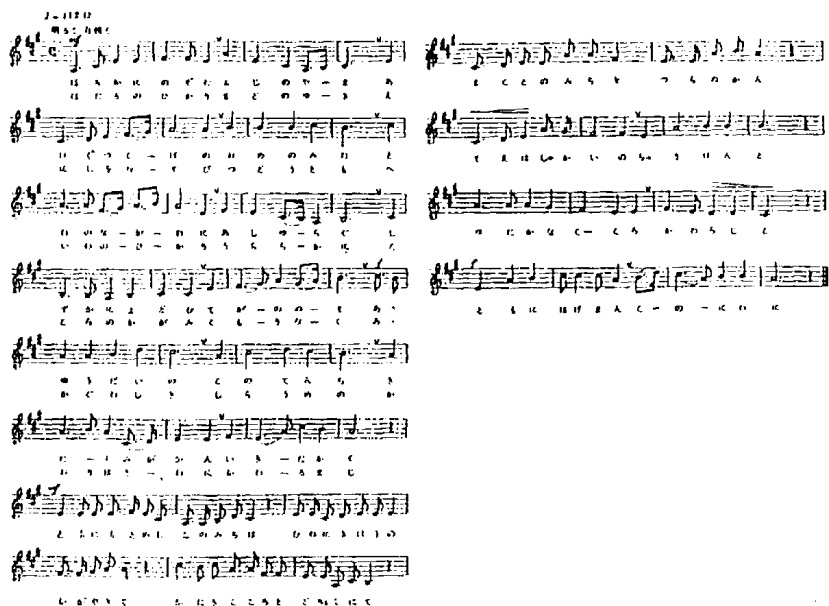
柏日体高等学校



校歌

井上 弘夫 作詞
小村三千三 作曲

一、遙に望む富士の山
仰ぐ筑波の男女の峰
利根の流れの芦ゆらぐ
静かに淀む手賀の沼
ああ雄大のこの天地
鍛え磨かん意気高く



二、 雪の光窓の雪

縁を結び集う共
 平和の光麗かに
 心の鏡曇りなく
 ああかぐわしき白梅の
 香りは永遠に変わるまじ

三、 共に求めしこの道は

共に求めしこの道は
 胸に希望の輝きて
 かたき心と努力にて
 誠の道を貫かん
 末は社会の中堅と
 豊かな心変わらじと
 共に励まんこの庭に